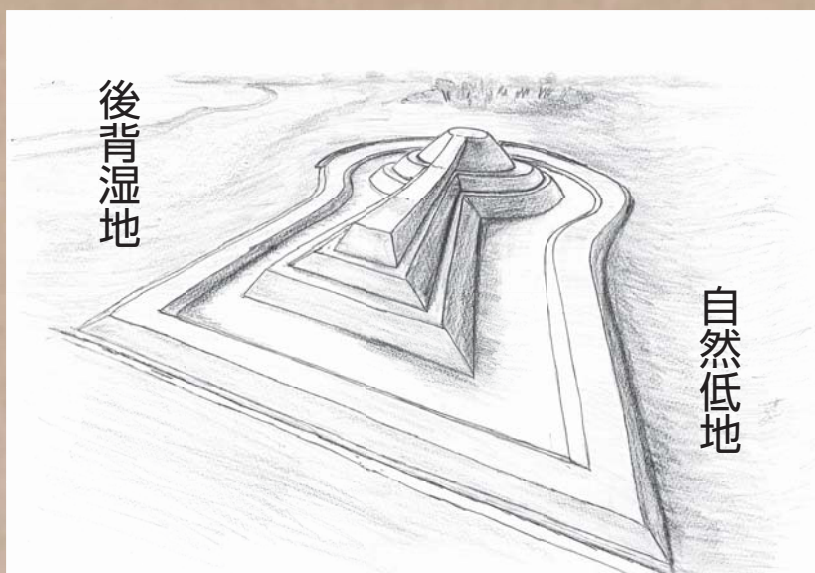


横瀬古墳の被葬者像

古墳には『方墳』『円墳』『前方後方墳』『前方後円墳』などいろいろな形があります。古墳の形、大きさが被埋葬者の格式を示していて、『前方後円墳』は、地域のリーダー的人物の墓と考えられています。そして墳長100mを超える大型の前方後円墳となると、広域的に影響力のあった人物と言えるでしょう。全国的に



(図4) 横瀬古墳復元イメージ

見るとヤマト政権のあった近畿地方に大王墓を中心として墳長200mを超える巨大前方後円墳が集中します。前方後円墳の各地への分布は、同時にヤマト政権の影響力の広がりを示しています。南九州では主に4世紀代から、盛んに前方後円墳が造られるようになり、生目古墳群

(宮崎市)で、南九州の最初の広域的盟主の墓とも言える大型前方後円墳が造られるようになります。5世紀に入ろうとする頃に志布志湾岸でも九州で第三位の規模を測る唐仁大塚古墳(東串良町)が築造されます。5世紀前半になると、九州でも突出して巨大で、かつ近畿地方の技術を多分に採用した男狭穂塚・女狭穂塚(宮崎県西都市)が築造されます。男狭穂塚の被葬者は大王家との姻戚関係を背景とした豪族で、広域的な盟主として君臨した『諸県君牛諸井』とも言われています。その後、南九州における最後の広域的盟主として、横瀬古墳の被葬者が出現するので。

このように日向・大隅ではヤマト政権との深い関わりを示す大型前方後円墳が集中的に築造されます。ではなぜ、九州でも日向・大隅に集中するのでしょうか？

少なくとも弥生時代には、大隅半島—東九州—瀬戸内—近畿を結ぶ海上における交易が頻繁に行われていたように、後のヤマト政権にとっても、この南回りの海上交易ルートは南島や大陸を結ぶ重要な意味を持っていました。そのため、ヤマト政権はこの南回りルートにあたる地域の豪族と手を結んだのです。また、当時の北部九州の勢力がヤマト政権にとって油断のならない存在であったとすれば、日向・大隅との結びつきはこれに対抗するための策であったとも考えられます。

横瀬古墳は鹿児島県教育委員会が行った発掘調査での出土遺物、また横瀬古墳とほぼ同時期に造られたと言われている神領10号墳の発掘調査(平成18~20年鹿児島大学総合研究博物館)での出土遺物からも、ヤマト政権と深くつながりがあった人物と言われてきました。

今回の二重周溝の発見は、古墳築造にあたって近畿の古墳築造技術が取り入れられており、また横瀬古墳築造期において周庭帯・二重周溝の構築は希少であることから、ヤマト政権と深いつながりがあったことをより濃厚に示す成果と言えます。

二重周溝が造られている大型前方後円墳がヤマト政権の中でどう格付けされるのか今後の研究に期待が寄せられます。

(文責 大崎町教育委員会 内村憲和)